**四万十川の暮らしと文化**

四万十エリアの生活は、近代の開発とはほとんど無縁の四万十川を中心とするものです。曲がりくねった四万十川は、深い森林に覆われた山の中を流れ、海へと続く196キロに及ぶ渓谷を切り開き、絶壁や氾濫原、石の多い河原といった地形を生み出しています。この川沿いの地域では、ダムや土手を使って川を制御しようとするのではなく、その自然の美しさと繊細な生態系を保全することに力を入れています。

四万十川の恵み

この地域は、四万十川の豊富な水生生物に頼っており、その水生生物も、ここの栄養豊富できれいな水に依存しています。特にアユは、餌となる藻類が育つ、汚染されていない水を必要とします。四万十川の中流から河口までの地域には、ハゼ、ウナギ、テナガエビ、そしてモクズガニがたくさんいます。四万十川が太平洋に合流する汽水域ではアオサノリ (緑色のノリ) が育ち、収穫されて日本中で販売されます。

伝統的な漁法と厳格な漁期も、四万十川の生態系のバランス維持に寄与しています。葉のついたままの枝を束ねて水中に沈めることで川エビやウナギをつかまえる「柴漬け」といった伝統的な技法を使う漁師を、今でも目にすることができます。夏の夜、漁師たちは火のついた松明 (最近ではLEDの照明) を振って網にアユを追い込みます。これは火振り漁と呼ばれる技法です。地元の子どもたちは、小さなころから、この川の漁の伝統について学びます。アユが藻類を食べた痕跡のある川石を見つける方法や、ペットボトルでエビ用の簡単な罠を作る方法などを学ぶのです。

毎年の洪水と共に暮らす

洪水は、四万十川沿いの生活の一部となっています。この辺りは、毎年、雨季とそれに続く台風の季節である6月から10月にかけての降水量が多い地域です。集落は、過去の洪水位より高い位置にある丘の斜面に作られています。米は、川に近い平坦な氾濫原に植えられています。いっぽう、野菜は、丘の斜面のさらに高い場所に植えられています。田畑の上を走る道路は、川よりも標高の高い場所に建造されていて、各住宅に続いています。寺や神社は丘の最も高い場所に建てられていて、各地域を見守っています。また、自然災害の際には避難所になります。年によっては、洪水が野菜畑にまで達し、道路に押し寄せることもあります。10年に1度ほど、住宅の玄関まで打ち寄せることもあります。

沈下橋

この辺りの橋は、川の力に耐えられる設計になっています。水面近くの低い場所に建造される沈下橋は、欄干を設けないことで、洪水と流木への抵抗を減らしています。もともとは、小さな渡り船がこの川を渡る唯一の方法でした。洪水が多いため、船で川を渡るのはとても危険な場合がありました。沈下橋は、渡し船に取って代わる開発中の道路網をつなぐために、1930年代に初めて建設されました。両岸の船着き場には、小さな石地蔵 (旅人を守り死者の魂を見守る地蔵菩薩の石像) が置かれていました。現在、この地蔵は、船着き場に取って代わった沈下橋を守って立っています。沈下橋は今でも各地域をつなぐ不可欠なライフラインとなっていて、ここを訪れる人たちの間では素朴な景観として人気です。